

キャリアパス拡大フォーラム (PART 1)

日 時：2007年12月16日(日)

テーマ：『博士がつくる21世紀社会～科学技術人材配置の夜明け～』

基調講演

○司会(蛸名)：午前の最後の講演に移りたいと思います。立命館大学衣笠総合研究機構研究員の水月昭道さんに「岐路に立つ大学院・チャンスを得た社会～あなたが今なすべきこと」という題でお話をいただきます。

簡単にご紹介します。水月さんは九州大学大学院博士課程、人間環境学博士ですね、修了後、現在、立命館大学研究員をされています。最近、『高学歴ワーキングプア』という本を出されています。では水月さん、よろしく願いいたします。

☆

講演4：『岐路に立つ大学院・チャンスを得た社会～あなたが今なすべきこと』

講演者：水月 昭道 氏(立命館大学衣笠総合研究機構 研究員)

どうもこんにちは、水月です。よろしく願いいたします。私は「岐路に立つ大学院・チャンスを得た社会」ということで、そのあとに「あなたが今なすべきこと」という副題が続くタイトルでの発表をさせていただきたいと思いますが、実はこの一番最後のところに「あなたが」と書いてありますが、当然、私も含まれておりまして、きょうは当事者としてここに立ちまして、「私たちが今なすべきこと」ということで少しお話のほうをさせていただきたいと思います。

昼ご飯前なので飛ばしていきたいなと思っているのですが、私がきょうここに立つようになりました経緯というのは、2ヵ月前ぐらいに、先ほどご紹介いただきましたけれども『高学歴ワーキングプア』という新書を出しました。そうしたこともありまして、このやろう、過激な本を出しやがって、ということで、ちょっとここに来て話をしなさいということではなかろうかと私としては捉えておりますけれども(笑い)、そんな感じで、きょうはこの本をなぜ書くに至ったかというようなことも含めまして、少しお話を続けていきたいと思います。

この本は内容的には博士問題を扱っております。なぜこれほど博士問題がひどくなってしまったのかということをおなりに調べまして、その構造を少し把握したいということで、それを内容にまとめたというかたちになっております。

それで執筆の動きなのですからけれども、なぜ執筆しようかという動機なのですからけれども、最大の動機は私の仲間が消えていくということがこれまで数多く発生したことにあります。同期であったり先輩であったり後輩であったり、それから近くの研究室のよく知っている顔の人たち、といった方々が次々と消えていくわけなのです。私は皆さんとは異なり人文系のほうの出身になりますが、こういったことがずっと続いて今となっております。

私の知っている人たちは社会に貢献したいという思いが非常に強い真面目な人たちでした。ところが彼らはどれほど勉強しても、どれほど努力しても、例えば博士号を取っても社会に活躍する場はないということがずっと続いていまして、このことを本人たちが知ったときにどんどんと心身の体調を崩していくとか、元気がなくなっていくということの中で、社会との関わりが薄れていくということが起こったわけなのです。友が消えていくというのは非常に辛いもので、こうした怒りとか悲しみというのが本書執筆の最も原点のところにあるだろうと私は自分で分析しております。

今、私はここにたまたま、まだ元気な姿で立っておりますけれども、私自身もこうした人たちと特別に違うわけではなく、いつ消えていくかわからないわけです。というのは、現在は大学のほうの연구원というポジションで勤めさせていただいていますが、来年の3月には任期が切れます。それ以降はまったくもって決まっていませんで、今、一生懸命に次のことを何とか探しているわけですが、まだまったく展望が開けておりません。そうした中で私自身、こうした渦中におりますもので、気持ちがどのように揺れ動いていったのかということと本書の内容とが重なっている部分がかかなりあるわけなのです。

5年前、私は博士課程の3年生でした。その当時から仕事を探しておりましたが、ぜんぜんないわけなのです。先ほど申し上げましたように、博士号を取ってすらもまったくないというのが文系の状況であります。5年ちょっと前ぐらいまでは、文系の場合は博士号はなくて当たり前、博士の3年を終えて少し研究室のほうでいろいろな仕事こなしていて、それからどこかに移っていくというような感じが正式な職を得る主なスタイルだったわけなのですが、これがちょうど5年ぐらい前から非常に厳しくなりました、博士号を持っていないとダメだよというのが文系のほうでも一般的になってきました。

ですので、私のほうも博士3年でしたけれども、これを終えてすぐ仕事に就きたいと思いましたが見つかりませんので、まず博士号を取ろうと切り替えました。それから急いだのですが、1年半くらいかかりまして、結局、博士5年のときにやっと博士号を取得というようなことになりました。今から3年前になります。

やれやれ、これで何とか専任教員の公募にエントリーしても大丈夫かと思って、とことん出すわけなのですが、ぜんぜん引っ掛かりませんで、現在までに 40 以上公募に落ちています。結局、博士号を取得してまるまる 3 年ほど経って今に至っています。

この間、最初の 2 年間は、博士号を取ったあと研究室で研究員のほうをするというかたちで続いておりました。それは給料はほとんどゼロですから名ばかりの研究員ということになります。そのあと昨年ですけれども、現在の立命館大学の研究員のほうに赴任いたしました。ですが、ほとんど状況は変わっておりませんで、独りだから食べていける程度というような感じでやっています。非常勤講師とかそういうのをやっているのでも何とか食べられるかなというような状態です。

こういうのが今の私の経歴なのですけれども、こうした状況ですので、私だけでなく文系にいる人間というのは今ものすごいあせりを抱えております。いったいどうしたらいいのだろうかと思うのですけれども、これがどうしようもないというような感じの状況がずっと続いているわけなのです。なおかつ自分たちの知っている顔、友達が次々に消えていくというようなことが続いております。こんな社会というのは何かおかしくないかというように思えてきたわけなのです。それで調べてみるかということで、いろいろなことを調べ始めたわけなのです。

そうしますと、いろいろなことがわかってくるわけです。いろいろなことというのはどうということかという、大学院重点化によって大学院生が増えた。そのことによって人が非常に溢れてしましまして、職がなくなっているのだと。このことは皆さん、知っているわけなのです。ところが具体的にどれほどの数字が変わっていったのかということをおいいますと、20 年前にはたった 7 万人しかいなかった大学院生、これは修士もドクターも合わせてです。7 万人しかいなかったのが、現在では 26 万人をオーバーしているとか、あるいは、神戸大も含めまして旧帝大やそれに連なるいわゆる研究大学ではすでに学部生の数よりも院生の数のほうが増えているという事実とか、それから博士での就職率というのは概ね 5 割だろうということがだいたいわかってくるわけなのです。

こうした具体的な数値を見るにつけて、暗い情報しか出てきませんので、気分もだんだん暗くなってきまして、私は調べて最後はうなったわけなのです。知らなければよかったなど (笑)。これは本音で、知ってしまったことによって、それまでの重苦しい気持ちがさらに絶望的な気持ちに変わっていったわけなのです。

こうしたデータが、本書の 1 章、2 章の部分にあたるころなのです。実は、私はこの

部分を本書のトップにもってきてしまっていて非常に申し訳ないなという気持ちが今発生しております、それはなぜかといいますと、本書刊行後に多くの人から意見をもらいました。特に院生さんとか、きょうここにきているポスドクのお仲間の皆さんにいろいろな意見をいただいたのですが、そのときに皆さんがくださった意見の多くが、本書の1章、2章を読んで、非常に厳しい現実を知りました。それは非常にありがたかったと。ところがあまりに厳しかったので絶望的な気分になりました。論文を書く意欲もなくなっていくし、今後どうやっていこうかというような気力もなくなっていく。そうした気分の中で本書をパタンと閉じて部屋の中でうずくまるというようなことになってしまった。というような意見はかなり多くもらいまして、しまったなというような気持ちになったわけなのです。

というのは、私は何も現実だけを見てもらって、皆さんの元気がクシャッとなるようなことをやろうというようなことを考えていたわけではまったくなくて、私はこの本は実は院生を元気づけようと思って書いた部分というのが非常に多かったわけなのです。ところが見事に最初に具体的な数値を、厳しい現実を見せすぎた感じで、最初にちょっとつまづいてしまったということになってしまったのです。

しかし、実はこの本は最初のほうは厳しいのですが、後ろのほうは展望が開けるのです。少し元気になれるような内容になっております。博士問題というのはこのように現実を知ってしまうと、誰でも元気をなくしてしまうというようなかたちにならざるを得ないような状況が続いているわけなのですが、私自身、そういう中で現在も生きております。

ですから、ここからが大事なところなのですが、絶望の最後のボトムがあるというか、行き着くところまで行くと底に着いてしまうという感じになるわけです。そうするとそこから浮上していくということが始まります。私も本書の1章、2章をまとめたあとに少し心境に変化がついてまいりまして、ここから浮上していくというようなかたちのことを考えていかないといけないだろうなというように変わってきました。それは5章、6章、7章のところで、だんだん気持ちの変遷が見られていくということで、本書は私のそうした気持ちの移り変わりみたいなものとシンクロしているのかなという気もしております。

話は元に戻りますが、博士問題ですが、この絶望的な環境がどうやってもこの状況から変わらないというのがわかってしまうわけです。わかってしまったときに、ではどうすればいいのかというと、もうこれは開き直るしかないということで、ここから生き残るすべを考えることが大事だろうというように変わっていきました。そうした開き直りの心境が後半部分に連なっていくのです。

ではどのようにしていったらいいのかということで、まず私が考えたのはとにかく人に会おうということを考えました。本書の執筆段階ではさまざまな人に会いお話を聞かせて頂いておりますが、私が特に気になった、あるいは良いお話だったと思う方々に登場していただいて本書を進めております。その中で特にパイブドビッツという会社の社長さんにお話を伺ったときのこと、それからそのお仲間もいたのですが、皆さんとディスカッションをやったことが非常に私の印象に残っておりまして、実はここに絶望の淵からどのようにしてしぶとく生き残っていくのかというヒントみたいなものが少し隠されているような気がしたわけなのです。そのヒントというのは、一言でいうと何だったのかということ、何事にもこだわらないという考え方でいくということなのです。もうこれに尽きるということなのです。

どうということかといいますと、実はそのパイブドビッツの社長さんというのは、今、IT関連の会社の社長さんなのですが、出身は建築学のほうなのです。建築学で博士号まで取得されております。そして博士号を取得して大学院を修了した直後に起業を行なったわけです。私はそこが非常に気になりまして、なぜ約10年もかけて建築学のスペシャリストになったのにまったく関係のないITのほうに進出して行って、しかも成功するかどうかもわからない。なぜそうしたトライをしようと思ったのですかということを知りました。そうしますと、彼はこのように答えてくれました。自分は学問を真摯に追究するというのと飯を食べるということは別のことだと考えていますよとおっしゃるのですね。

それを聞いたときに私はちょっとはっとしまして、だいたいの文系にいる人の多くは、自分が10年近くかけてきたものでご飯も食べたいという方が非常に多くいらっしゃる、今でもそうした方と会うのですが、だいたいはそこを大事にしたいという方のほうが多いです。私はそれは当然のことだろうと思うのです。10年近くかけて一生懸命に努力して、いろいろなものを身につけてきて、その道のスペシャリストにまでなる。それなのになぜ別のことをしてご飯を食べなければいけないのかということなのです。ところがパイブドビッツの社長さんは、それでかまわないとおっしゃるのです。そこにすごい衝撃を受けたわけなのです。

彼はなぜそういうことを言うのかということですが、べつに自分のやってきたことと別な道に進もうが、やってきたことが無駄になるわけではないのだから、というようにも言葉が続けてくれました。それは何かといいますと、やはり博士論文を書く過程で皆さんすごい努力をしますので、いろいろな知識とか、スキルとか、問題設定能力あるいは解決能

力、そういったものがかなり身についてくるわけなのです。それで食べるというときに、つまり生き残るというときに、実は一番大事になるのはそのあたりのところだろうというわけなのです。ですので、そこを活かして、そして自分を外から眺めてみるということ。そしてその中で自分はいったいどのような生き方をしたいのかということ自分を問いかけるということ。このあたりが生き残っていくのに大事なことのよう気がしてきたわけなのです。

今、社会というのは非常に速いスピードで動いておりますから、いろいろなことにこだわりすぎると、ここで乗り換えないと生き残っていけないよというときにタイミングよく乗り換えることに失敗して、こけてしまって、穴にはまって落ち込んでいくというようなことがあります。常にフットワークを軽くするためには、自分の考え方にこだわらないということが大事であるということが、いろいろなディスカッションの中で見えてくるわけなのです。

そしてフットワークを軽くしていると、目の前に新しく開けてくる可能性に注目をする機会を自分の中でいつも持ち続けていけるということができるようになるのだということなのです。ですから、この動きの速い社会の中で生き残るために目利きをよくして、そしてフットワークを軽くして生き残っていくためには、自らのこだわりを捨てること、これが一番大事なのだということを私は理解したわけなのです。

パイブドビッツの社長さんはそれを実践するかたちでIT業界のほうに足を踏み入れまして、だいたい7年ぐらいの間に東証マザーズに上場しまして、去年ぐらいから社員を大募集するというような動きになりはじめました。

つまり、建築学の博士号を有しながら、心を軽くして専門とは異なるけれども社会の中で新しい変化の芽を感じ取って進出して行って成功した博士が、今度はそこに新しく人材をここにほしいというような動きを作りだしているわけなのです。つまり、社会の中に新しいポストが生まれてくるということなのです。そして、私たちも、この社長さんと同じようなことを出来る可能性をもっているということなのです。今、博士を取り巻く現状というのは非常に厳しいですけれども、しかしこの閉塞感の中で実はいろいろな新しい動きも発生しているということを少し例として取り上げたかったわけなのです。つまり、社会は博士号取得者という有能な人材をたくさん得るチャンスを今つかんでいるわけです。

私たちも、その新しい動きに乗り遅れないようにすることが大事だろうと思うのです。一言でこうしたことを言うと、自分の居場所にこだわることの危険性みたいなものはっ

きりと認識しておくことが大事だろうということなのです。自分がやってきたことを大切にすることは非常に大事なのですけれども、こだわりすぎると実はそこには危険が待ち受けているのだと。こういう現実があるのだということを私たちは忘れてはいけないのだろうなということなのです。

さて、深刻な博士問題ですが我が国の歴史の中で、高学歴ワーキングプアと呼ばれるような状態にならざるを得ない人たちが生まれるという歴史は、かつてもあったのではないかと思って、少し遡りますと、たいして遡らないうちにすぐに同じような状況があったというのがわかってきました。それは何だったかといいますと、昭和の初期に大恐慌が起きますと、そのときに学士様でも仕事がないというような時代があったと聞いています。その状況の学士様というのは、様が付くぐらいですから現在の博士と同等か、へたをすればそれより上ぐらいの扱いかもしれないぐらいの大した存在だったようです。そうした学士様でも仕事がないという時代がちょっと前にあったということなのです。

今という時代は、そうしたかつての歴史をなぞっているのかもしれませんが。高等教育をめぐる我が国の環境についても、この時代において、学士まで取ったけれども仕事がないから持っても仕方がないといって廃れきったかということ、そうではなくて、時代が進むに連れどんどん高学歴化の流れというのは成長していきまして、いまや博士を取ろうという人は非常に増えて、毎年1万6000人以上の博士卒を輩出しているわけなのです。

このような流れというのを見てそれが何かといえば、やはり歴史は繰り返されているのだなということなのです。そうした繰り返される歴史の中に我々は今たまたま巻き込まれているのだろうなという気が私はしているわけなのです。そしてこういうときというのは人生が自分の手を離れているときということなのです。自分でいかに努力してもどうしようもない状況に巻き込まれることというのは人生の中で避けられない1つであって、この中で我々はどのように生き残っていかなければならないのかということ、ここから再度考えていくということが大事なのだろうということがわかるわけなのです。

私たちは今現在、大きな過渡期にいるのですけれども、それを明確に理解して、そして認識することが大事だと思っています。その中で世の中に新しい風を起こす側になるという意思が必要になってきているのではなかろうかと思えます。それは自分自身がこうなりたいと思うということだけでなく、避けられない運命みたいなものの中で、我々はどうやって生きていかなければならないのかということ、天の声を聞くというような感じにもなってくるかと思えますが、それを自問自答して行く道を見つけ出すという感じ、この

ことが一番大事なのではなかろうかということなのです。

天の声というと別の天の声を聞きたいという方もいらっしゃるかもしれませんが(笑い)、我々とはとにかく、今、過渡期にある大学院生、それからポストクの皆さんというのは、まず自らがどのように身を処すべきなのかということ再度、自らに問うていくということが、今、最も求められることではないかと思います。そのことによって、しぶとく生き残っていくという知恵とか勇気とか力というものを自らの中に沸き起こらせていくことができるのではなかろうかと思っています。ご静聴有り難うございました。

○司会(蛸名)：どうもありがとうございました。それでは質問とかコメントを。

○原：神戸大学の原です。ちょっと私、あなたに会えるとは思わなかったというか、知らなかったのだけれども、出張のときにぱっと時間潰しに本を買ったのですよ、その本。それで読んでいて、話を聞いていてどこかで聞いた話だなと思ったらこの人だったのね。

私自身は小さい字はぜんぜん興味はないのだけれども、内容に興味があるのですけれども、きょうお聞きして、きょうの内容は第1章、第2章の話はあまりしませんでしたよね。私は物理をやっているのですけれども、物事には原因があって、その原因に対してメリットを受ける人がいて、それである結論があるわけです。そういう見方で見ると、博士課程をものすごく大きくして誰が享受を受けたか、メリットを受けたかということ、大学の先生方なのですよね。それがものすごくたくさんの方のメリットを受けている。それであとでオーバードクターとかポストクの問題が出てきたときに、ああ困った、しまったとやっているわけです。

そうすると、きょうの4人の話の中でも要するに若手研究者に対して話しているのだけれども、原因をつくって、それでメリットを受けた大学そのものに対してどうこうしなければいけませんよという、そういう議論が聞かれるべきだと思うのですけれども、それについてどう思いますか。

○水月：私は今からこういったキャリアパス拡大の動きの中で大学側に非常に期待したいことは、1つは今こういう動きが始まりましたので、今から新卒者になられる方々には非常に勇気づけられる動きだと思うのです。非常にありがたいお話なのです。ところがすでに卒業されている方が莫大数おられるわけなのです。この積み残された方々をどうするかというのはこれから非常に問題になってくると思います。

それで今現在のままでいくと、それこそ正規の職にも就けず、アルバイトのような状態で高齢化していくというような方々が本当に莫大数にのぼる。このことをぜひ、再度、忘

れずに常に思い返していただいて、この方々がいて、それで救助しないという方々が無尽蔵にいるわけですから、ここを忘れずに救済していく、と。しかし現時点でとにかくできることという新卒者のことをまずやっていくことが大事だと思いますので、そのあたりのことを忘れずにやっていただきたいというのが強く願うところでもあります。

○司会（蛭名）：どうもありがとうございました。時間がないのであともう1つぐらい。

○山田：時流を読むことが大事だというのはまったくそのとおりで思ったのですが、例えば今ITとか、いわゆるベンチャーですか、そういうところがあって、そこを探せばいいのではないかという話に聞こえたのですが、現実問題としてベンチャー企業などは10年、20年、30年と続けるのは難しいと言われてますよね。そのあたりまで含めて時流を見るということになったときにどうなのだろうかということと、それと参考になると思うのですが、昭和時代の学士様の就職難ですか、それは学士様たちはそのときにどのように対応していったのかというのを、もし調べておいででしたら教えていただくと助かるのですけれども。

○司会（蛭名）：ちょっとお名前を。

○山田：すみません、京都大学のドクター3年生の山田といいます。

○水月：貴重な意見をありがとうございます。実は時流を見るというのは、見ようと思っても全部見通せる存在ではないのが人間でして、いかにうまくやろうと思ってもどこかでいろいろな落とし穴に巻き込まれていくということがよくあります。ですので、すごく長いスパンでそこを全部できるように見続けるかということ、それは本来的になかなか難しいものがあるだろうということなのです。

だけれども、常に準備をしておくということが大事なのだと思うのです。常に何かが起こるかもしれないという準備をして、その中でできる最大限の努力と準備をして、いろいろなことに対処していく、と。それが結果的に流れをひきよせて生き残っていくということにつながっていくのではないかと考えています。

2番目の学士さんのことは、これは今ちょっと一生懸命にいろいろ調べているところで、具体的にどうやって彼らが生き延びていったのかというのは、今いろいろなところに行って調べているところです。それはまた追い追いついてどこかで発表できればと思っていますので、期待してください。